いだてん
韋駄天の記

劇作家 岡部耕大 ㊿

近頃は、スケジュールを調整してでも、関東の松浦会によく出席させていただく。長崎県人会にも出席させていただくが、松浦の人は隅っこにいる。やはり長崎県人会の中心は長崎市の人のようである。これはひがみである。

映画には思想あり

ただ、中村法道知事はわたしのことを覚えてくださり「映画、進んでますか」と声を掛けてくれる。知事には長崎県庁で一度、プロデューサーとご挨拶をしただけである。「『長崎の鐘』を長崎で撮影するかもしれませんのでご協力を」という挨拶である。もちろん、金銭的な協力を要請したわけではない。具体化すれば、そんな要請もあるかもしれないが、まずは精神的な支えがほしかった。知事は「いい企画ですね」とはいったが「やれ」とはいわなかった。政治家は責任は負わない返答をするという。それはそうだ。長崎で映画を撮る企画はいっぱいあるそうである。その日のことを覚えてくれているだけでも光栄である。

長崎県人会で知り合ったのが、志佐中学や伊万里高校の二つ上の先輩吉田公人氏である。我が家にも友人を連れて尋ねていらした。その友人は92歳の方である。陸軍の特攻隊に関係していたと話をしてくれた。そして、自分の体験談を映画にできないかとおっしゃった。

わたしは舞台劇で「知覧にて」を書いている。家内の故郷が鹿児島の陸軍特攻基地があった知覧である。もう、かれこれ40余年は知覧に通っている。知覧なでしこ隊という特攻隊を送った女学生だった人が家内の親戚にいる。その人はもちろん、友人の方のお宅までおじゃまして写真を見せていただいたり、お話を伺ったりした。映画にできないことはないが、その方の条件は「永遠の0」みたいな映画にということである。似たような映画を作っても意味がない。それがネックである。映画には、どんな娯楽映画でも思想がある。そこに映画監督は懸けている。

「知覧にて」の内容は、若い日に知覧に兵隊で行っていた西の果ての老人が、いまも頻繁に知覧を訪ねている。息子夫婦の新婚旅行も知覧にしろという。そして、自分も同道するという。知覧に行った息子夫婦は驚いた。父親の愛人が割烹料理屋をやっていて、父はそこに泊まっていたのである。知覧はねぶた祭りで賑わっていた。矢櫃橋のたもとの矢櫃庵という庵に一人で住んでいる老婦人が、若い兵隊の写真を見せて、この人を探してくれという。特攻の途中にエンジンのトラブルがあり、島に不時着した写真の人は西の果てにいるという。

（松浦市出身）